様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２０日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21401030
研究課題名（和文）　アラビア半島の港町遺跡から探る海の技術交流史研究

研究課題名（英文）　The technical influence between Arabian Peninsula and East Asian countries seen from the maritime trade history

研究代表者
佐々木　達夫（SASAKI　TATSUO）
金沢大学・名誉教授
研究者番号：60111754

研究成果の概要（和文）：研究目的は、アラビア半島のオマーン湾港町遺跡ディバを発掘し、その出土品を用いて地域間の技術的影響の様相を時代的に探ることであった。遺跡出土品には現地産製品、及びオマーン、イエメンなどの周辺地域産製品の他に、現在の中国、ベトナム、タイ、ミャンマー、ウズベキスタン、イラン、イラク産の生活用品があり、その種類と組み合わせ、量的な比率、流通状態の時代的変遷から、当時の海上貿易で物が交流した実態が推測できるようになった。こうした研究は広範囲の陶磁器資料を扱っている研究代表者による成果が期待されていたが、世界史的にも未知の地域の歴史資料が増加したことにより、研究の意義が深まることとなった。

出土した各地域産の陶磁器やガラス、生活用具、装飾品は、地域間技術交流の実態と海上貿易が果たした地域生活文化の形成過程を考える資料として有用なものとなった。層位的に収集した出土品の整理分類で貿易品と地域内生産品の同時代組み合わせの状態が判明した。産地ごとに分類した陶磁器の種類・器種・器形を調べ、代表的な器形は実測図を作成し写真を撮影し、重量や破片数を計測してデータ表を作成した。これまで他の遺跡で調査研究した物や研究成果と比較して、各種製品の流通圏が想定できるようになった。各種類の陶磁器製作技術を比較検討し、地域間の技術交流の様相を時代的にとらえることもできるようになった。運ばれた物資が生産した地域の文化特徴を他地域の文化要素に伝え、その痕跡が輸入した地域の技術に影響し、地域間技術交流の程度や文化接触の様相を伝える資料となったことを実証した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to shed light on the technical influence between Arabian Peninsula and East Asian countries seen from the maritime trade history. We had excavations at Diba port town site in Sharjah Emirate, the United Arab Emirates. Houses were dug and many finds were unveiled from the site. Excavated ceramics were imported from East and Southeast Asian countries as well as Iran and Central Asia. Finds from the site tell us that the usage of ceramics as a daily life materials, dating of the combination of finds, changing of the daily life materials by periods and their quantity at the excavated site. Using these excavated date from Diba, it becomes clear that technical influence between Arabian Peninsula and the other countries by the seaborne trade in the Indian Ocean in ancient times.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2010 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2011 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
年度			
年度			
総　計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：アラビア半島，ディバ遺跡，発掘，貿易史，出土陶磁器

１．研究開始当初の背景

東西アジアの文物交流史は欧米研究者が早くから研究し、20 世紀前半にシルクロードを通してローマや西アジアの文物が漢や唐へ運ばれたことが知られた。20 世紀末には中央アジア以外のインド洋・南シナ海に面する港湾都市遺跡の発掘成果から、文字史料に加えて豊富な考古学資料を利用した東西交流史概説が描けるようになった（佐々木達夫『陶磁器、海をゆく』1999）。こうした研究状況を背景に、具体的資料を用いた地域間交流の技術的交流や他地域文化に与えた影響の程度を論じることができる。この分野には多様な研究課題があり、未解決の問題が残る。すでに成果が得られた課題でも、現在の研究レベルから振り返ると、再検討すべき内容もみられる。

申請者はこうした問題意識からエジプト、イラク、イラン、アラビア半島、中央アジアの遺跡で、輸出された中国や東南アジアの陶磁器から影響を受けたイスラーム陶器の器形・文様等の類似関係を調べてきた。最近はペルシア湾やオマーン湾の沿岸地域で遺跡調査を実施し、出土陶磁器を整理・分析・資料化し、それを利用して上記課題を追求していた。申請者が 2007 年に刊行した「ペルシア湾・オマーン湾遺跡出土の陶磁器編年」「オマーン湾岸北部地域の遺跡出土陶磁器」「西アジアに輸出された 14～15 世紀の東南アジア陶磁器」「イスラーム陶器の研究と成果」などはその成果である。そこでは、都市や農村、港町という違いにより、すなわち遺跡の種類や性質によって出土する陶磁器の種類や量、産地、組み合わせに特徴が見られること、地域的に流通する産地別の特徴すなわち商圏があること、時代によって各産地の商圏が変化すること、などを指摘した。申請者が 2006 年に刊行した「アッバース朝と唐の陶磁器生産技術の交流」「アラビア半島港町遺跡の食料残滓が語るもの」「中世末～近世の貿易陶磁流通」「マサフィ砦の発掘と保存修復」「フジェイラ首長国のイスラーム時代遺跡踏査」「ジュルファール出土陶磁器の重量」「ポルトガルが襲った中世港町遺跡コールファッカンの発掘 2001～2005 年」なども、同様の視点から論じたものである。これらの論文で使用した出土品はいずれも申請者の発掘資料であった。

他地域に輸出された交易品は輸入品として使用した地域が、在地産として模倣品を生産する同種類製品に影響を与えたことが確認できる。インド洋貿易で運ばれた陶磁器のなかでは、中国陶磁器が他の産地に影響した程度が大きい。影響を受け、形や文様、生産技術を模倣したイスラーム陶器は周辺地域に輸出され、さらにそれが他地域に影響を与え、在地産とともに各地域内で使用される。そうした影響、模倣に関する具体的な実態は、遺跡から出土する陶磁器を層位的に分類・集計して判明するが、そうした視点からの研究は申請者たちが進めてきた。とくに陶磁器は遺跡から発掘される出土品の 9 割以上を占め、どの地域の遺跡でも普遍的に出土するため、広範な地域の様相を比較検討する歴史資料として有利な研究材料である。申請者たちの「考古学陶磁器」研究はこの分野の最先端をいくと思われる。

申請者は大学院生から中国、東南アジア、西アジア、中央アジアの「考古学陶磁器」を研究している。中国の陶磁器の産地研究は研究者数が多いために進んでおり、申請者も『元明時代窯業史研究』（吉川弘文館 1985）で文学博士を取得した。東南アジアの窯跡研究と出土品の特徴も研究が進行中で、申請者もカンボジア初の窯跡発掘を行い（青柳・佐々木『タニ窯跡の研究―カンボジアにおける古窯の調査―』連合出版 2007）、ミャンマー青磁がインド洋各地に大量輸出された歴史事実を発見した（「西アジアに輸出された 14～15 世紀の東南アジア陶磁器」『青柳洋治先生退職記念論文集』雄山閣 2007）。西アジアや中央アジアの陶器研究は東アジア陶磁器研究より遅れているが、申請者は最近イスラーム陶器の年代調査をウズベキスタンやアフガニスタンで実施した（東京文化財研究所との共同研究）。こうした広範囲にわたる地域調査研究で、申請者は地域間の技術交流史を比較研究する基盤を築いている。

２．研究の目的

アラビア半島ペルシア湾とオマーン湾の港町遺跡で発掘した出土品を用いて、地域間の技術的影響の様相を探る。現地産製品の他に現在の中国、ベトナム、タイ、ミャンマー、ウズベキスタン、イラン、イラクなどで作られた生活用品がペルシア湾・オマーン湾の港町から出土するが、その種類と組み合わせ状態、流通の時代的変遷を明確にする。貿易で運ばれた物資が生産された地域の文化特徴を他地域の文化要素に伝え組み入れる役割を果たし、その痕跡が遺跡から出土した物を作る技術に残り、各地域間の技術交流の程度や文化接触の様相を伝える。ホルムズ海峡の港町ディバ遺跡を調査拠点とし、周辺の遺跡

も含めて出土する各地域産の陶磁器やガラス、墓誌名を比較検討して、古代中世アジアの地域間技術交流の実態と海上貿易が果たした地域生活文化の形成過程を他地域の状態と比較研究し、物作り技術が果たした歴史的な意義を論じることが研究目的である。

３．研究の方法

調査の方法は２つある。第一に、オマーン湾岸の古代中世港町遺跡の層位的発掘と資料収集。第二に、それと関連する地域の出土資料との比較検討である。これを基礎に、ペルシア湾とインド洋の間に位置するオマーン湾沿岸地域の遺跡から出土するイスラーム陶器やガラスの技術史研究を行う。すでに9 世紀～10 世紀（サマラ遺跡、アーリ遺跡）、13 世紀（ルリーヤ遺跡）、14 世紀後半～15 世紀前半（ジュルファール遺跡）のペルシア湾を中心とする事例研究は成果を挙げた。今回はヘレニズム時代、ササン朝時代及び 15 世紀後半以降の資料を集成し、一つの地域で継続的に物から見た他地域との技術交流を検討する。

他地域との交流と影響を具体的な物を通して研究するには、各地域における生産の実態すなわち産地と年代、製品の形や文様、技術的特徴を知ることが必要である。すでに各地の生産状況を研究してきた申請者は、併せてペルシア湾・オマーン湾沿岸の港町で貿易や交流の研究も続けてきた。これらの研究成果を基礎にオマーン湾の港町ディバ遺跡を層位的に発掘し、地域間技術交流の年代的な資料不足を補充する。古文書が少ない地域であるが、南アラビア文字などが記された墓誌を用いて物と文字から地域圏を検討する。

当該課題については、2007 年にスミソニアンやバハレーン政府が開催した研究会に招待され、中国白磁とメソポタミア白釉陶器の関係について発表し、その方向性の有用性を確認した。今回プロジェクトは、インド洋貿易品がもたらした古代中世アジアの地域間技術交流史を総合的に結論づける研究であり、考古学資料が語る物の移動と模倣、新たな地域文化創成の歴史を描くことにある。

研究拠点とするアラビア半島アラブ首長国連邦ディバ遺跡で層位的発掘を実施し、出土品を時代・産地別に分類し、撮影実測して重量を計測し、比較検討の基本資料とする。陶磁器を研究資料の中核におき、層位別・産地別にその技術的特徴を東アジア・東南アジアの陶磁器及び西アジア、中央アジア、アラビア半島の陶器と比較する。製作技術に加えて、中国陶磁器と文様比較、東南アジア陶磁器と器形比較、イランと中央アジアの陶器の器形・文様比較、及びその意味を探ることが主要な研究方法となる。物に残る技術の痕跡を観察し、各地域の陶磁器生産技術の比較と流通を探り、技術交流史の変遷を描きだす。産地不明瞭な陶磁器やガラスは日本で化学分析し、産地推定と性質研究を行う。

４．研究成果

文化交流の存在を明らかにするため、広範囲な地域でいかに共通性が見られる文物が発見されるかを示すのが、いわゆるシルクロード研究の基本的課題であった。しかし、発掘された遺跡の具体的な出土品を数多く見ると、広い地域の共通性のみを強調するより、各地域間の独自性や他地域との違いを明確にすることがより重要であると思う。そこで、出土品を分類して年代別に地域的に広がる様相を明らかにする作業によって、文物が流通する地域的な違いを始めに問題とする。そうすることで、文化交流による共通性の歴史的意味をより正確に捉えられると思う。これまで共通性の陰に隠れて見えにくかった、地域差・地域的特徴を具体的な出土品としての物に残る技術によって探る研究は、新たな研究分野を開拓することとなる。

こうした研究は広範な地域間の研究で取り上げることが少なく、具体的な成果を挙げる研究方法として独創的である。大量に出土する考古学資料の利用は、世界各地の研究者にとっても今後の研究法に寄与すると期待される。文化交流史研究は古くから歴史学の研究課題であったが、同時にグローバル化した現代を考える地域基層文化の歴史研究として現代的意義をもつ新鮮な課題でもある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

①佐々木達夫, 佐々木花江, 2012「オマーン湾港町ディバのデプス工房跡―アラブ首長国連邦ディバ遺跡第 7 次調査(2011 年)」『考古学が語る古代オリエント・第 19 回西アジア発掘調査報告会報告集』113-118.査読無

②佐々木花江, 佐々木達夫, 2011「博多・奈良・京都のイスラーム陶器」『第 18 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会, 152-163.査読無

③佐々木達夫, 2011「平安京の貴族はイスラーム陶器を見たか」『土車』122:2.査読無

④佐々木達夫, 佐々木花江, Eisa Abbas Hussien Yusef, 2011「砂漠の遺跡踏査 Al Madam 2011」『金大考古』71: 35-42.査読無

⑤佐々木達夫,佐々木花江, 2011「オマーン湾の港町を掘る―アラブ首長国連邦ディバ遺跡第 4 次調査(2010 年)」『考古学が語る古代オリエント・第 18 回西アジア発掘調査報告会報告集』136-140.査読無

⑥佐々木 達夫・佐々木花江, 2011「奈良出土青緑釉陶器瓶の産地・流通・ルート・用途・内容物・価値」『金沢大学考古学紀要』32: 13-17.査読無

⑦ Tatsuo Sasaki, Hanae Sasaki, 2011, Excavations at A'Ali Islamic site, "Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa" Vol.32, 18-46.査読無

⑧佐々木花江, 佐々木達夫, 2010「バーミヤーン産施釉陶器とウズベキスタン陶器」『第 17 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』33-45.査読無

⑨佐々木達夫, 2010「シャルジャ首長国の歴史遺産と伝統文化」『UAE』48: 7-10.査読無

⑩佐々木達夫,佐々木花江, 2010「ムサンダム半島の港町を掘る―アラブ首長国連邦のディバ農園遺跡第 1 次発掘、海岸遺跡予備発掘・第 1～2 次発掘―」『今よみがえる古代オリエント・第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集』142-146.査読無

⑪佐々木達夫,佐々木花江, 2010「シャハリ・ゴルゴラ 2008～2009 年地雷撤去に伴う採集陶磁器予備カタログ」『金沢大学歴史言語文化学系論集史学・考古学篇』2:179-236.査読無

⑫佐々木達夫,佐々木花江, 2010「炉とゴミ穴―アラブ首長国連邦の中世遺跡出土例の紹介―」『金沢大学考古学紀要』31:44-105.査読無

〔図書〕(計 1 件)
①佐々木達夫,佐々木花江 編, 2010『シャルジャ、砂漠と海の文明交流―アラビアの歴史遺産と文化―』シャルジャ展日本開催委員会,1-136 ページ.

〔その他〕
ホームページ等:
http://tatsuo1945.wordpress.com/

新聞等:
①佐々木達夫, 2011「アラビア半島 未知の歴史・文化」読売新聞夕刊 1 月 27 日
②佐々木達夫, 2010「シャルジャ展に寄せて」北国新聞 朝刊文化欄 2010 年 5 月 13 日

６．研究組織
(1)研究代表者

佐々木 達夫 (SASAKI TATSUO)
金沢大学・名誉教授
研究者番号：60111754

(2)研究分担者

佐々木 花江 (SASAKI HANAE)
金沢大学・環境保全センター・准教授
研究者番号：40303276

蔀 勇造 (SITOMI YUZOU)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：90126079

(3)連携研究者

該当なし